高齢者施設におけるリスクマネジメント研修プログラム開発に関する研究

－「介護事故予防」と「利用者の求める生活の実現」の同時追求を目指して－

○　社会福祉法人新生寿会　　三王　健司（810875）

金子　努（県立広島大学・1262）、越智　あゆみ（県立広島大学・5018）

高齢者施設、リスクマネジメント、研修プログラム

１．研 究 目 的

現在、多くの高齢者施設でリスクマネジメントは実施されている。なかでも、近年注目を集めているのは介護事故に関するものである。介護事故に関するリスクマネジメントの取り組みは多岐に渡るが、そのうちの一つに職員研修がある。高齢者施設での事故防止体制を調査した先行研究（三菱総合研究所 2012）によると、研修の手法として最も頻繁に用いられているのは講義（63.3%）である。しかし、講義のような知識提供型の研修では内容が記憶に残りにくいことなどから、研修の実施方法には工夫が必要である。

介護事故を予防するためには、介護従事者の危険感受性向上を図る必要がある。受講者参加型の研修であり、危険感受性向上が期待できるものとして一定程度現場に普及しているのが KYT（危険予知トレーニング）である。しかし KYT には、研修の流れが現場の実践過程(PDCA サイクル)に即していないということや、個々の利用者の状態像や意向に応じた介護を考案できないという課題がある。これらの課題を解決できる研修プログラムを開発し、現場で活用することによって、より質の高い介護実践につなげることができる。

以上の問題意識に基づき、本研究では、現場の介護従事者が（1）PDCA サイクルに即した形で、(2)「介護事故予防」と「利用者の求める生活の実現」を同時追求する態度を獲得することのできるリスクマネジメント研修プログラムの開発を研究目的とした。

２．研究の視点および方法

先行研究レビュー、KYT の課題を踏まえた研修プログラムを独自に開発し、A 介護老人保健施設で実施して、その有効性を検証した。開発した研修プログラムは、事例をもとに介護従事者が PDCA サイクルで思考し、個々の利用者に応じた対策を講じることのできるものとした。具体的には、事例Ⅰ「夜間トイレの場所が分からず居室内で放尿する重度の認知症高齢者」と、事例Ⅱ「他者の役に立ちたいが、杖を持たずに下膳しようとする重度の認知症高齢者」という二つの事例を作成した。事例Ⅰでは個人ワークの後グループワークを実施（1 時間×2 日間）し、事例Ⅱでは個人ワークのみ実施（1 時間）とした。

研修対象者は、A 介護老人保健施設に勤務する介護経験が 1～3 年目の介護従事者 8 名であった。研修の実施前後で、参加者にアンケート調査を実施した。(1) 事例Ⅰの個人ワークでの回答を内容別に分類、(2) 総回答数や、回答例との一致数を事例Ⅰ・Ⅱで比較、(3) アンケート結果の分析から研修プログラムの有効性の検証を行った。回答の採点・評価に

ついては、筆者及びA施設管理者が事前に作成した各事例における回答例をもとに行った。

３．倫理的配慮

A 施設及び研究協力者に対して、事前に研究目的と方法、プライバシーの厳守などについて文書を用いて説明し、同意を得た。

４．研 究 結 果

（1）事例Ⅰの個人ワークでの回答結果

本研修プログラムでは、写真を見て、介護事故につながり得るリスクと、想定される介護事故を書き出す個人ワークを設定している。事例Ⅰの個人ワークで参加者が書き出した回答を内容別に分類したところ、リスクと想定される介護事故として、「認識力の不足から物にぶつかる」や「本人に適さない環境により転倒する」、「放尿跡で滑る」、「部屋の暗さにより椅子につまずく」などが挙げられていた。次に、「介護事故予防」と「利用者の求める生活の実現」を同時に追求するために必要なアセスメント内容を書き出す個人ワークを設定しているが、そこでは、利用者の歩行状態、視覚、トイレや睡眠時の習慣などが挙げられていた。このほか、具体的な介護実践方法やモニタリングの視点を書き出した結果からも、参加者が事例をもとに PDCA サイクルで思考し、同時追求を目指した具体的な対策を講じることのできる研修プログラムとなっていることが確認できた。

（2）個人ワーク回答の比較検討結果

事例Ⅰでは、個人ワークの後にグループワークを設定し、各参加者が個人ワークで書き出した内容を共有する時間を設けている。事例Ⅱは、事例Ⅰでの経験をもとに取り組むような研修プログラムとなっている。事例Ⅰと事例Ⅱの個人ワークでの回答を比較検討したところ、事例Ⅱの方が個人ワークでの総回答数及び回答例との一致数が増加傾向にあった。

（3）事後アンケート結果

事後アンケートでは、設問「研修を受け、普段介護をする上で何らかの変化があったか」に対して、「以前より、転倒について意識できるようになった」、「他者の意見を聞くことで視野が広がった」、「これまで危険性ばかりを重視していたが、同時追求について考えるようになった」、「アセスメントを実施することによって『介護事故予防』と『利用者の求める生活の実現』を同時追求できると知った」などの記述が得られた。

5. 考 察

本研修プログラムには、（1）「介護事故予防」と「利用者の求める生活の実現」の同時追求を図ることができる、（2）PDCA サイクルの流れに即した思考過程の形成ができる、（3）グループワークの実施によって参加者の能力を平準化できる、（4）短時間で実施できるなど活用可能性が高い、という特徴があり、その効果が期待できることが確認できた。

今後、複数の現場で本研修プログラムを実施し、改良を重ねていくことが課題である。

（文献）株式会社三菱総合研究所（2012）『介護施設における介護サービスに関連する事故防止体制の整備に関する調査研究事業報告書』.